

初対面なれど弄花女の縁に打ち解けて墓へ案内す秋晴れの朝

水をかけ碑文を写す弄花女の蚊に刺さるるも厭はずに
する

弄花女の墓と並んである両端の二基の墓の関連性を話して三基の墓に花を供えて貰いました。弄花女は花が好きだったとのこと。寺に帰り、茶菓子やコーヒーをいただき、いろいろの話をしました。私がああ墓地を知ったのは女学校三年生の夏、昭和十四年（一九三九）八月、弄花女の墓の奥の清子童女の墓の由来などを。

平成十一年（一九九九）十一月十七日、三人の女の人が来られました。

東京より來られし人は丁寧ていねいに弄花女りやうかじよの墓はかの礼れいを言はる

弄花女の墓のまはりの石碑にもてきばき発言す東京の人は

蚊も居らず無数の古き小屋野家の石碑を調べて二時間

東京桂の会

旅
音
記

竹

お七とすもいふ事なうかゝるひんがさす月の子に
飛べ、これよりたゞのちて是といふことなりけり
いづれかさんと云ふは諸方の玉乃殿へ候まじきことゆへ
のもの——いんね人々のうちをめぐるとして出で申し
いかにもさうぞと云ふも、あつても名言らうとて、うろ人共
それ——りのめ違ふとも君様候へ——と云ひてみえ
その旅よりわき各々入あつてもともしといふれ——い
ぢつれてあつ

大甲自天都「あつたれん」梅月八日と清と小川を隔
りやのふちもやうにさていつ糸出さ糸打「んあ。

やうやうに寺にもど^りて寛^びぎておいしきお茶に喉^{のど}を潤^{うる}す

いただきし名刺にさす^ぎと感服す女性史研究家の柴桂子先生

寺を辞して四柱神社に参拝の三人に私も同行しました。参拝の後、文政十一年（一八二八）の俳句奉納額を御覧になつて、洗われて白くなつたのを惜しんでおられました。それから弄花女の家だった中国銀行下津井支店の側の、橋に案内をして、橋の由来を述べました。「この橋は、吹上寛政橋と言つて寛政の頃に播磨屋さんが初めて造つた石の橋です」。

小さなる橋にも古き歴史あり吹上寛政橋を心して渡る
平成十二年（二〇〇〇）三月二十七日、宮口公子さんと
柴田ミツルさんが、弄花女の墓の拓本をとりに来られまし
た。

うらうらと春告げ鳥の声の下弄花女墓碑の拓本をとら
るる

不思議なり歴史家数名の知らざりし弄花女の墓をわれのみが知る

本当にうららかな一日でした。

女もと昔もいへはいさ、かおもひたつ 比は十一月の十三日なり うみの子のたはむれて足をいたくそこなひければいか、はせんと思ふに 諏方（ワタタ）の國の殿に仕へまつれる多つ木の何かしといへる人はかゝるわさのくすしにて 近き里はいふもさら也 遠き國にも聞えて其名高かりきとある人の そゝのかしければ せうとの君福住何かしと共に とみに その旅ようあす 名さへ多つ木と聞もいとうれしく心いそかれて出たつ

十四日 天気よし おくりの人々帰らん日を待といふ 川

を渡り 弓やのさはもやうく^マに過ていつ原近き原町にそ
宿る 里の名にもす いとせはき家なり されと家戸自^{ママ}

はもとよりしれる人にて　むつまじくあるしゝたり

十五日 けふも天気よし つとめて出たちぬ 追分といへる里あり こは山吹といふ里よりいつる道と共に逢て またわかるゝ所なればなるへし 猶行々てうわほの里に宿りぬ

十六日 空も猶きのふのことし 大たきりとかいへるいとおそろしき早川あり すきし六月の比打つゝき雨ふりてさかまく水に人三人四人なかにけりと聞は 身のけたちてかこし 待人はなけれど松嶋とかいふすくに宿りぬ

十七日 きのふにかはりて空のけしきもはれやらず 風さへいみしう吹ていと寒し 天龍川の水上なる橋はといふ里をいて 山ふところのいとあたらしい所より海つらすこし見えて かの赤人の雪はとよみしふしの高ねかはるかに白うはれたり 田子のうならなるとも童うちほゝゑみてゑにかゝまほしなといへり

白たへのふしのしは山しはしとてときをもうつすうみのけしきか

下の諏方のすくにいたりぬ まつ御社にまうつ ものふりたる木ともなどの神さひてたてるみ山を、かみ奉るものと尊し 拜殿は近き比新に造りたるにてきよらをつくせりやう／＼よひ過るほとに高嶋の里竹屋某かもとにいたりてまつ童をそいたはる 此やとりには温泉ありて をちこちの人も来宿りて多くつとひたる 中にさくの郡の人とか湯よりあかりにけるか ぬきおきし衣や旅の調度やうのものなど見えぬとてうちおとろき こゑのかきりを出してぬす人あなりと あかはたかにての、しれは 人々さわきたちて家のくま／＼をさくり 道のちまたをも追行つ、 あかつきはかりにからうしてかくみゐてこしとなん

十八日 けふも天気よし つとめて多つ木氏をとふらふ聞しにたかはすいと上手にてまかれるを引はへものしつ、のひらかにと思は、 今はつかみそかあつかひいとよくな

はなくてむかへの人を待とのみあり

廿二日 天気よし けふは多つ木氏より帰るさにひゐなのいりたる三尺のみつしにひとよるひに品々しつらひ またちいさきやともなどめきて所せきまでひろけつ、起し子はこれをなこほちそと むかし物語めきてあそふもらうたし

廿三日 例の事にけふもゐて行て帰りぬ きたとなり男をみなましりて酒のみつ、三つのをのことをいまめかしく合せうとふこゑの近く遠く聞わたされておもしろくおかしされとはて／＼は はらたちゑんするこゑの聞くるしくゑゑるは又にくゝさへ

廿四日 よへは風いとあれてつま戸の内までも吹入れつつともし火さへきえぬれとあかつきよりなこりなくしつまりて 雪になりぬるにやと思ふもしるく

くさまくらかりねの床も海つらもみな白たへの雪のあけほの

廿五日 きのふの雪の名こりにて いとさゆれは火桶の本にのみをりゐてくらしつ

廿六日 例の所へ行て帰る方のほとより雨そほふりければいと、わひしくて古里の空のみ恋しう思ひをるにたよりあなりなど あるしのいへるもうれしくてとみにはしりいて、見るに家の従者なり 我せの君よりとていたしたるをひら

してよとねもころに教へければうれしさいはんかたなし上の社にまうつ こは武南方命をまつれり 下の社は后神八坂刀売命をまつりて諏方上下両社となんいへり

十九日 猶きのふのことし すさの者帰すとてまつらんとおもひくらせるよひ／＼のゆめには帰るふる里の空

廿日 けふは雪すこしふりたり 多つ木氏え例のこと童□をゐて行て足の事ものす

廿一日 よへは夜もすから室^かのふすまもさえとほる心ちして童もいざときやうにあればさすりあかしつ けふはれたりいつもの所へもとく行て例の事ものす 帰るさは温泉寺にまうつ 此寺の本尊は地藏菩薩也 我せの君さいつ年こ、ちそこなひ給ひし時 此地蔵菩薩にしもねきことしければほとなく病ひおこたりにけり こゝに又子そたての地藏菩薩もおはしませは 我子の足もいえさせ給へと心いれてしつかにをかみ奉りて宿りには帰りぬ さてせうとの君あすはふる里へ帰らんと給へは かれいひの用意するを童見て な 帰りそと顔に袖をあて、ゆふ かれ飯もけしきはかりにてうつふせり 十にあまりたるはおそろしとはいはぬものそかし はたちを過るすさの多かれは むくつけき事あらしとの給ふに しはしありてひそかにいふさらはわらはも此ふみ古里にといへは見るに 文の中に歌

き見れは

なきわたる千とりもつまやしとふらんあらしにふくる
とこのさむしろ

とあるを見て心のしたに

すはのうみやあしのかれはに風さへてこゝにもひとり
千とり鳴なり

廿七日 天気よし けふもかの所へゐて行て帰りつ童はゑなともものして遊ぶ ひて子海のさま口かけり

廿八日 やう／＼足ものひらかに成ぬれば 今は古里へ帰らん事をたつ木氏えいひやるとてたはふれに

よきくすりよきほとたまへよきいしのよく見てよしと
いは、よからん

廿九日 天気よけれといみしくさゆれは埋火のもとにうつくまりつ、 足さすりをやくにてくらしつ

十二月つきたちなり けふは人々髪けつり湯あみなとしつ、旅ゐながら神にも御酒奉りて 我ともからもさかつきとうてつ、 ひねもすあそびたり 海は近けれとさかななきはすこし口をし

二日 天気よし けふは帰らんといいあへりければ 童もよろこひて さて出し日かすをよみもて見れば 十日あまり五日旅ゐはしたりけん むかへやこんと待けるほとに一人二人来つとつく すさはこれかかれかと又いひあて顔に

はしりいつれは せうとの君のおはせるこゑさへ聞ゆるも
うれしく はしるにすへりいて、たかひにつゝかのなき事
なとと語りあひて あゆひとくまも言やます しはしあ
りてふくろにいれしみなこもちをいたしければ童もとも
くひて皆ふくらみいねたり

三日 天気よし あすは古里へ帰らんと旅よりたひのやう
あす されと知人なければうまのはなむけもなし

四日 天気よし 卯の時はかりに宿りは出ぬ 童のみこに
のせておのれはかちよりいたり わひしさに道のほとい
と近くあるあるかといふ山をこゆへしと ともなるをの子
にいへは あなおそろし 雪いとふかくてつらゝをりにさ
へあめれは いかてかとも もとこし海つ路を行くに お
きより帰る舟を見て

家つとにこれといひて海人をとめわれにえしめよも
ふしつかふな

五日 天気よけれと風吹あれていたくさえぬれば あけは
て、宿りは出ぬ 此わたりの里人なと多く飯うゑの事をし
なけて語るもいと心くるし 修行者にさへものとりさす
かたひなとはましてむかし片岡山のその旅とゝの給ひしも
かゝるをりにやと見えたり

六日 此日はいたくかうしにければしるさす

七日 けふは日さへよし 帰らんことをおもへはうれしく

『諏訪日記』について

大井 多津子

「東京桂の会」では、主宰者柴桂子の蒐集した旅日記の
なかから森本都々子著『諏訪日記』を読み、翻刻した。

都々子は浜松の豪商川上助九郎貞承の女で、信州飯田藩
島田村の庄屋森本真弓の妻である。夫真弓は二十三歳で家
を継ぎ、飯田藩主堀家の御仕送り御用達をつとめた。飯田
藩は二万石の山国の藩であったが、それに比して城下町は
大きく、寛政十年（一七九八）の統計では商人、職人が五
八一六人もいた。それは飯田が東海の名古屋、岡崎、吉田
（豊橋）から多くの物資が中馬の背によってもたらされ、

飯田商人の手を経て信濃の方に売られた。中継商売をした
卸売の間屋も多く、中馬が栄えたのは江戸時代中期から後
期で、中心地の飯田では一日に「出馬千疋 入馬千疋」と
いわれるほどにぎわった。そのため独特の気風が生じ、俳
諧、和歌、歌舞伎、茶の湯、花火などの文化がもてはやさ
れた。都々子は幼い時より遠州大谷村に住む内山真龍門に
和歌を学び、嫁しては夫妻ともども歌の添削をうけた。ま
た高林方朗 服部菅雄 森廣主 市岡猛彦 福住清風等に
も歌の道を問い、教えを乞うている。

て 道のほともさのみくるしからす なゝくほとかいふ里
にしはしいこひぬ そはといふ物あり あやしきうつわも
のにもりたれと いときよらなればしるの葉よりもおほ
ゆ さてこのそはといふ物は 承和の帝の勅ありて國國に
うゑさせたまふよし 古き書にも見えていと上代よりめて
けるものなりなといへは 女のかくさかちたててこちたく
いはんはにくしと人々さゝめきあへり そこよりすさの者
古里へけふといひやりければ やかてむかへの人々 来あ
ひたり うちつれてよひするほとに家あには帰りぬ た
いらかにものしたるよろこひ うからやから来つとひて
杖かさをとりくにもうす うれしうなん

天保七年十二月

この『諏訪日記』は天保七年（一八三六）十一月の中頃
から十二月七日までの、旅と湯治の日記である。

一人息子のまさ久が戯れて足をくじいてしまった。どう
したものかと心を痛めていた時、高島藩諏訪家に仕える、
その道では名高い多つ木某という医者 の噂を聞き、そこへ
治療に行った時の日記である。この時都々子四十七歳、ま
さ久は十二・三歳位である。遅い子持ちである。都々子は
なかなか子宝に恵まれず、三十三歳の時浜松の実家に里帰
りした時、孕石村（現掛川市）の孕石天神に参詣したと、
『遠江夢路日記』に書かれている。そして翌年男子を出産
した。『遠江夢路日記』は都々子が三十三歳の時に、浜松
の実家へ里帰りした時の日記である。

天気にも恵まれて、飯田から諏訪まで往復八日間の伊那
街道の旅と十五日間の湯治の日記である。

十一月

十四日 飯田を出立。出原まで約三里位。

十五日 追分を通り、うわほの里（上穂）まで約五里位。

十六日 大田切川を渡る。宿で人が流された話をきく。

松島まで約五里半位。

十七日 諏訪も近くなり心やすらくなったのだろう。富
士の高嶺をはるかに見て万葉集の山部赤人の歌

「田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける」を田子の浦でなくともと子と話をしたのであらう。まさ久は絵に描きたいと云う親子のほほえましい会話ができこえるようだ。下の諏訪の社に参詣し、高島の宿につく。

十八日 治療をはじめ。上の御社に参詣。

十九日 従者をかえす。

廿日 雪が降り、まさ久を背負うて行く。

廿九日 この日まで治療に専念する。

十二月

朔日 旅居ながら髪をけづり湯あみなどして神にも神酒を奉る。旅にありながら朔日の禊を行っている。

三日 治療が終り明日は古里へ帰ることにする。

四日 宿を出立。

七日 「七久保で休む そばという物あり あやしき器にもりたれどしいの葉よりもと思う」ここでも万葉集の有間皇子の歌「家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」を引いている。

「むかえの人々来あいて 杖かさをとりとりにもうす うれしうなん 天保七年十二月」で終わっている。

「むかえの人々来あいて 杖かさをとりとりにもうす うれしうなん 天保七年十二月」で終わっている。

歴史の窓

江戸時代のよそおい — ノートⅡ —

山 本 春 美

はじめに

北宋時代の書画家米芾が、「天下第一山」の編額を書くとき、「第」の字がなかなか決まらなかったそうである。街中を歩いて、ふと目にとまった女性の髪型をヒントに「第」の字形が決まったそうである。女性の髪型が米芾の書に影響を与え、現代の書家にも少なからず影響を及ぼしていることは興味深い。

前回のノートでは、衣服について考察してみた。今回は髪型について考察してみたい。昭和の始め頃まで結われていた丸髷、島田髷、今に残る力士のちょん髷、大銀杏といわれるような髪型が結われ始めたのはいつ頃からなのであるか。どのような髪型があり、流行はどのようであったか、その時代の様相は髪型にどのような影響を及ぼしていたのか。髪結いを職業とする女性が現れるようになったことなどを前回について、浮世絵、禁令などを念頭に考察したい。

都々子には「都々子和歌集」「くさくさ」の詞」「言葉書」「遠江夢路日記」等がある。

「諏方日記」の翻刻を掲載することを快く許可して下さいました。森本信正様に心から御礼申し上げます。

参考資料

柴 桂子 「近世おんな旅日記」 吉川弘文館 一九九六年
村澤 武夫 「伊那歌道史」 国書刊行会 一九三六年
「長野県歴史人物大事典」 郷土出版社 一九八九年
女子学習院編 「女流著作解題」 一九三九年
「豊田町誌」 一九九九年
「街道紀行」 毎日新聞社 一九九〇年

〒一七五〇〇九二

板橋区赤塚三二二八—三

TEL 〇三—三九三八—二七八九

一、髷の結われ始めた頃

今、髪型の流行の主流は何であろうか。茶髪であろうか、毛先の不揃いなカットであろうか。髪の色も、結い方も、髪の色も千差万別である。かつて髪は烏の濡れ羽色といわれ、藤村に「君が緑の黒髪も、またいつか見んこの別れ」と歌われ、艶やかな緑なす黒髪が良いとされた時が長く続いていた。『浮世風呂』にも「黒油でもなすつてもういっぺんおしゃらくをする気だもの」とあり白髪染めも黒である。髪の色主流は長い間黒であった。しかし、今、髪の長さ、色は好みのままである。髪の色を染め変えることによって自己を主張し、存在を確証させるものであるとしたら、ここ四、五年は髪にとって画期的な時代として記されることになるであろう。

長く続いた黒髪の時代にも、髪にとって画期的な時があった。大陸との交流が希薄になり国風文化が台頭した平安時代と、鎖国政策によって国風文化が開花した江戸時代である。両時代とも髪型に特徴があり、平安時代の長い下げ髪は他に例がなく、江戸時代の灯籠髷に代表される髷の結いよう、髷の種類が多さもまた他に例がないと思う。どのようにして、その長い下げ髪を結い上げるようになるのであるか。髷は、男性が冠を頂くために髪を束ねていたものであった。常に冠を頂いていた男性が、戦乱の時代を過ごし